第七十二章　次元移動

第七十二章　次元移動

【時・空】永久０２８９年・ノロの惑星
　　？年・六次元の世界
【人】瞬示　真美　フォルダー　イリ　ノロ　ホーリー　サーチ　住職　リンメイ
　　五郎　ケンタ　ミリン　四貫目　お松　Ｒｖ２６　ＭＹ２８　ＭＡ６０

＊＊＊

「イリ、少し時間をくれ。俺に考えがある。」
フォルダーに生命永遠保持手術の準備作業を中断して艦橋に戻ってきたイリが無言でうなずく。
造船所に到着したブラックシャークの横に青い時空間移動装置が不規則な回転を続ける。フォルダーとイリ、ホーリーとサーチ、住職とリンメイ、ＭＹ２８とＭＡ６０の誰もが息をのんで時空間移動装置の回転が無事に停止することを祈る。
やっと回転が停止してドアが跳ねあがると、勢いよくケンタとミリンが飛びだす。四貫目と五郎が無残なＲｖ２６の両脇を抱えて降りる。Ｒｖ２６の衣服は焼けただれて人工皮膚もはげて、むきだしになった部品や配線からスパークする不気味な音が聞こえる。
「すぐ電源を切らないと危険です」

ＭＹ２８がＲｖ２６にかけよると乱暴に胸の中へ拳を突っこむ。スパークが消えるとなんとかＲｖ２６を抱えていた四貫目と五郎に全体重がかかってＲｖ２６もろとも腰からその場に倒れる。最後に時空間移動装置から降りたお松はなすすべもなく四貫目のそばに立つ。

「ＭＡ６０！」

フォルダーがＭＡ６０に向かって叫ぶ。すでにＭＡ６０は肩のマイクで連絡を取っている。ＭＹ２８が四貫目と五郎にＲｖ２６から離れるように指示すると、機能が完全に停止したＲｖ２６を仰向けに寝かせる。

「ＭＡ６０」

再びフォルダーがＭＡ６０を呼ぶ。

「ＰＣ９８２１のチップセットを最新のマザーボードに装着してＲｖ２６に組み込め。そのほかの部品もすべて最新型のパーツを使って改造しろ」

イリが驚いてフォルダーを見つめる。そのときＭＡ６０が首を傾げてフォルダーにたずねる。

「ＰＣ９８２１のチップセット？そんなチップセットは聞いたことがありません。ＰＣ９８０１の間違いでは？」

「黙って命令を実行しろ」

造船所の隣の整備工場から数人のアンドロイドがいかにも頑丈そうな担架を抱えて走ってくる。Ｒｖ２６の真横に担架を置いてＲｖ２６を載せると今度はＭＡ６０といっしょに整備工場

に向かって走り去る。フォルダーはまるでＲｖ２６を人間のように扱う自分をふしぎに思うこともなく、ＭＡ６０の背中に向かって声をかける。

「Ｒｖ２６の容体に変化が現れたらすぐ知らせろ」

そしてイリの視線に気が付くとその視線から逃れるように五郎に語りかける。

「Ｒｖ２６はここまで来るのが精一杯だったようだな」

五郎が大きくうなずいて肩を落とす。そして自分の使命に気が付いて報告を始める。

「Ｒｖ２６のお陰でなんとか地球を脱出できました」

五郎の言葉にケンタ、ミリン、四貫目、お松が険しい表情のフォルダーを見つめて大きくうなずく。定員五人の時空間移動装置に六人も乗りこんでいたから、よほどの緊急事態が発生したはずだとフォルダーは確信する。

「Ｒｖ２６は最後の力をふりしぼって人間とアンドロイドが全面戦争に突入したと報告しましたが、そうではありません。宗教戦争のような感じです」

フォルダーとイリが首を傾げる。気落ちして足元を見つめる五郎に代わってケンタが説明を始める。

「宗教戦争というより、ある男が布教したことを信じる人間とアンドロイド、それを信じない人間とアンドロイドとの間で戦争が始まったのです」

ホーリーが口をはさむ。

「ある男？最長か」
同じくサーチが声をあげる。
「キャミやミトは？」
ミリンがはっとして視線をケンタからサーチに向ける。
「それが……」
ミリンが言いにくそうに言葉を切ると五郎が残念そうにつなぐ。
「行方不明です」
「無言通信は？」
五郎、ミリン、ケンタがそろって首を横に振る。サーチはミリンに近づきながらキャミに無言通信を送る。ほぼ同時にホーリーもミトに無言通信を送る。
ミリンが無言のサーチを見つめると抱きついて泣き出す。フォルダーは差しせまった危機を感じとるとＭＹ２８の顔を見つめる。
「ホワイトシャークを地球に向かわせる。ＭＹ２８、すぐ準備にかかれ」
「わかりました」
ＭＹ２８がホワイトシャークに向かうと住職がケンタに近づく。
「殺し合うための宗教は宗教ではない。情けない話じゃ。ケンタ！詳しく話してくれ」
ケンタが言葉を探すように考えこむと、サーチの胸で泣きじゃくっていたミリンが顔をあげ

て表情を引きしめると背筋をぴーんと伸ばして住職を見つめる。
「私が説明するわ」
ミリンは住職の前に立つと濡れた長いまつげを上に向ける。
「ある男が人間やアンドロイドに説教していたのは『アンドロイドを改造して子供を産むようにすべきだ』ということだったわ」
「それはノロが悩んでいたことじゃ」
「人間もアンドロイドも子供を造って共存できる新しい世界を創造して、地球を繁栄させることをその男が説いて回っていたの」
「最長じゃ！その考えはそれなりの意味があるのう」
リンメイが住職の袖を引っ張る。
「ミリンの話を聞きましょ」
『アンドロイドの人口を増やさないと人間がやっていけないのはわかりますが、それはアンドロイドを製造すれば済むことです』とキャミはその男の意見に反対しました」
サーチは報告の内容にも驚くが、ミリンが堂々とよどみなく説明する姿をまぶしく見つめる。
「でも地球にはアンドロイドを製造する設備はありません。完成コロニーのアンドロイドに相談することもできません。人間の生活を維持するだけのアンドロイドを確保するためにはアンドロイドに生殖機能をと考える人間が急激に増えました。一方、それに反対する人間や造った

子供が人間の奴隷になることを恐れるアンドロイドがキャミとミトの元に結集しました。そのうち武力による解決を望まないキャミが躊躇（ちゅうちょ）している間に、アンドロイドに子供を造ることに賛成する人間とアンドロイド、それに反対する人間とアンドロイドとの間に戦いが始まりました」

「そうなんだ。アンドロイドに子供が造れるのか、できるとすればどうすればいいのかというような現実的な論議はないまま、どんどん議論がエスカレートして、ついに戦争が始まった！」

ケンタが珍しく大声を出す。フォルダーがイリにつぶやく。

「力で押さえるわけにはいかない」

フォルダーは今まで体験したこともない事態に直面して苦慮する。それに鍵を握るノロはこの世界にいない。

「人間とアンドロイドの戦争ならなんとか仲裁もできようが、宗教戦争もどきの、しかも人間とアンドロイドが混じりあった戦争には手の打ちようがない」

ホーリーもフォルダーの考えを強く指示する。住職が腕とあぐらを組んで目を閉じる。

「ホワイトシャークの出航準備ができたら、わしは地球に向かう」

住職の言葉にリンメイがうなずく。

「アンドロイドが人間と対等になることに賛成する者と反対する者との戦争と言えるかもしれ

ません。人間対アンドロイドではないのです」
落ち着きを取りもどした五郎が住職に念を押すと、ホーリーが五郎にたずねる。
「勢力分布はどうなっている？」
「まったくわかりませんが、私の感覚では子供を造ることに賛成している者の割合はアンドロイドの方が高く、人間の方は低いような気がします」
「とにかく、現状を把握する必要がある」
フォルダーがホーリーを見つめる。ホーリーは迷わずフォルダーの意をくみとる。
「俺も住職といっしょに地球に行く」
「わかった。ホーリーをホワイトシャークの船長に任命する。ＭＹ２８を連れていけ」
「ホーリーが船長なら地球に向かう者は決まったようなものね」
サーチがホーリーを見つめる。ミリンがサーチをそしてホーリーを見つめる。
「今度は父さんといっしょだ」
「我らも」
四貫目の言葉にホーリーとサーチが首をたてに振って応える。その四貫目の横にいて、それまで黙っていた瞬示と真美が初めてフォルダーにたずねる。
「フォルダーはノロを捜しに行くんですか」
フォルダーは瞬示の質問に答えずに太い両腕を組む。

「地球の危機をなんとかしなければならない」
イリは何も言わずにフォルダーに近づく。真美がそんなイリを気にしてフォルダーに念を押す。
「フォルダーもブラックシャークで地球へ行くの？」
フォルダーは真美にではなく、近づくイリに深くうなずいてからきっぱりと言う。
「ノロを連れてだ」
イリの目が輝くと、フォルダーがイリの手を力強く握ってブラックシャークに向かって歩きだす。その後ろ姿をとまどいながら見つめる真美の手を瞬示が握ると真美を引きずるようにしてフォルダーとイリのあとを追いかける。

＊＊＊

「お願い、早くノロのところへ」
ブラックシャークの艦橋に着いたフォルダーの背中にいたたまれなくなったイリが哀願する。
「あせるな。おまえがあせると俺まであせってしまう」
フォルダーはイリにというよりは自分自身に言いきかせる。
「ごめんなさい、フォルダー」
「心配するな。中央コンピュータがノロの行き先を押さえている。俺と中央コンピュータに任せろ」

フォルダーは身近に相談できる実戦を積んだアンドロイドがひとりもいないことに一抹の不安を感じる。ＭＹ２８はもちろんのことＦＡ５１もここにはいない。鍵穴星での激戦で人間以上の判断力を見せつけたＲｖ２６も改造中で動けない。

「イリ、Ｒｖ２６の回復を待ってノロを探しに行くことにしてもいいか」

意外にもイリが素直な言葉を返す。

「ブラックシャークの船長はフォルダーよ。私は船長の命令に従います」

イリが艦橋から出ようとする。

「イリ、どこへ行くんだ」

「生命永遠保持手術設備の点検をします」

フォルダーはイリの背中から瞬示と真美に視線を向ける。

「今の地球の現状をノロに伝えるとすればＲｖ２６の情報は非常に貴重だ」

「その意見に大賛成です」

状況をつぶさに見ていた瞬示が真美に確認する。

「ノロの行き先を慎重に分析する必要があるわ」

真美が追加する。

「真美さんのおっしゃるとおりです」

中央コンピュータが真美に賛同する。

第七十二章　次元移動

「説明しろ」
フォルダーが中央コンピュータに命令するが、答えたのは瞬示だった。
「ノロのいるところへは時空間移動ではなく、次元移動しなければならないからです」
「次元移動？」
フォルダーは誰にたずねるともなく、天井に言葉を放り投げる。
「ブラックシャークは次元移動ができるのか」
瞬示と真美は中央コンピュータの反応を待つ。
「できるはずです」
ふたりがまさかという表情をする。
「本当か！ブラックシャークが次元移動できるなんて、ノロから聞いたことがないぞ」
フォルダーが反発に近い言葉を発する。
「多次元エコーという武器を持っていることからしても、ブラックシャークは次元移動できる性能を持っているのがわかりませんか？ワタシは六次元どころか百次元はおろか千次元、万次元、億次元の演算も可能です。ただし、以前六次元の演算をノロに頼まれたときに数日かかったことがありますので次元移動はとてもむずかしいかもしれません」
「何が言いたい！」
「ブラックシャークが次元移動できるとすれば、操縦はワタシしかできないのです」

＊＊＊

「Ｒｖ２６の改造はまだ終わらないのか」
「まだ、数時間は要します。そのあと新しい身体に慣れるまでかなりの時間が必要でしょう」
アンドロイド整備工場からＭＡ６０の返事が入る。
「そうか。慣らし運転のことをすっかり忘れていた。やむ得ない。Ｒｖ２６の乗船はあきらめる。ＭＡ６０、Ｒｖ２６が回復したら、いっしょにＭＹ２８に合流しろ」
フォルダーががっくりと肩を落としてうつむく。そんなフォルダーにイリは初めて重大なことをたずねる。
「ノロの許可もなく、ＰＣ９８２１のチップセットをＲｖ２６に埋めこんだ理由は？」
フォルダーが黙って顔をあげてイリを見つめる。しかし、フォルダーから出た言葉はイリへの回答ではなかった。
「ノロはなぜブラックシャークを使わずに丸腰で最長の誘いを受けたんだろう」
イリがすぐさま反論する。
「丸腰じゃないわ」
「レーザー銃すら所持していなかった」
「いいえ、ノロは『考える』という強力な武器をいつでも持ち歩いているわ」
フォルダーはそのとおりだと言わんばかりにイリに笑顔を向けると中央コンピュータに命令

を下す。
「ブラックシャーク、ノロの惑星から離脱しろ！」
ブラックシャークは音もたてずにドックから垂直に上昇する。
「ノロの惑星の太陽系の外へ空間移動！」
「空間移動開始！」
「空間移動完了」
「よし！」
フォルダーが立ちあがるとよくとおる声で命令を継続する。
「次元移動開始。全員ショックに備えろ。中央コンピュータ、頼むぞ。おまえだけが頼りだ」
「任せてください。次元移動準備完了。多次元エコー装置の全エネルギー解放！時空間移動エンジン停止。反重力エンジン停止」
ブラックシャークに大きな衝撃が走る。船首から粉のような虹色の細かい輝きが広がると、前方にあらゆる色を含んだ大きな光の塊（かたまり）が形成される。その光の塊（かたまり）を追いかけるようにブラックシャークのスピードがゼロから一気に無限大に加速する。噴火する火山の真上にいるようなきつい衝撃がブラックシャークを直撃する。
「バラバラになるぞ！」
フォルダーが叫ぶ。ブラックシャークは虹色に輝く光の塊（かたまり）に追いついてその中に突入する。

メイン浮遊透過スクリーンが美しい虹色に輝くと、深いが透明感のある緑色の泡立つものにおおわれる。まるで海が沸騰しているような光景に変化する。白波が沸騰した海から現れては渦を巻くと怒濤のごとく迫って来るような光景だ。時間が割れて空間が引き裂かれる。

誰もが恐ろしさのあまり目を閉じるが、目を開けたときには何ごともなかったように緑一色の画面になっている。落ち着いた中央コンピュータの声が静かにメイン浮遊透過スクリーンを見つめる者の耳に届く。

「次元移動完了」

いつの間にかブラックシャークから振動が消えて、すべてが静寂の世界に包みこまれる。メイン浮遊透過スクリーンは古い時代のグリーンモニターのように、緑色の背景に白い数字とアルファベットが流れるように次々と表示される。

「現在位置確認！」

「確認不能」

操縦士、航海士、測敵士から同じ返事が返ってくる。

「中央コンピュータ！ブラックシャークは本当に六次元の世界、しかもノロがさらわれた時空に到達したのか」

「それは、あの、その、ただいま確認しています」

「でも、ここがノロのさらわれた世界だとしたら、まったく未知の世界だ」

瞬示がやっと声を出す。フォルダーは平然とした表情で瞬示に応える。
「俺たちはいつも地図のない宇宙を航海してきた。心配するな」
フォルダーの言葉のあとにイリの声がする。
「生命永遠保持手術の準備は完璧だわ。あとは『死ぬ。死ぬう』とわめきながら助けを求めるノロを待つだけだわ」
真美はイリのなんともいえないノロに対する愛情を感じる。イリはノロを一途に愛している。それはベタベタとした粘りけのあるものではなく素っ気ないようにも見えるが、実は奥の深い機敏な理性に支えられたたぐいまれな心から自然にふきだしたものだ。瞬示も真美も同じ感覚を共有する。ふたりはイリが気丈夫なだけの女ではないことに改めて気付く。
メイン浮遊透過スクリーンは相変わらず緑一色で複雑な記号や数字、そしてそれらを結ぶ演算記号が現れては消え、消えては現れる。まったく音がしない。
「六次元の世界には音がないのか」
フォルダーがつぶやいたとき、中央コンピュータの報告が入る。
「確認完了。間違いなくここは六次元の世界でノロを乗せた時間島の到達地点です。ただし、それ以上のことはわかりません。演算を続行します」
「わたしたち、ブラックシャークの外に出てノロを捜します」
真美の言葉に瞬示が驚く。同時にイリの身体がピクッと反応して真美を見つめる。

「わたしたち自身のためにも、行動を起こさなければ」
真美が瞬示を強くうながすが、瞬示はためらう。
「わたしたち、ひょっとしたら緑の時間島で色々探索できるかもしれない。最長は緑の時間島を操ることはできなかった。黄色の時間島を操作するのはうまかったけれど」
ふたりのそばにイリが近づいて真美の腕を強くつかむ。
「お願い！私もいっしょに連れていって」
「それは無理だ」
瞬示が残念そうにイリを見つめる。
「でも、ノロは躊躇（ちゅうちょ）することなしに丸腰で六次元の世界に向かったわ。生命永遠保持手術の効果が消えると言ってたわりには平然としていたわ。きっと逆にノロは時間島の中にいれば安全なのを知っているのよ。まして緑の時間島ならもっと安全じゃないのかしら」
瞬示がイリの気迫に押される。真美が意外にもあっさりとイリの見解に賛成する。
「無理だと決めつける必要はないわ」
「フォルダー、私、ノロを連れて帰ってくる。いつでも生命永遠保持手術ができるようスタッフに緊張感を与えておいてください」
フォルダーがイリを直視してうなずく。
「イリの好きなようにしろ」

＊＊＊

薄ら明るい緑の時間島の中でぼやけたみっつの裸体が浮かんでいる。

【これが六次元の世界なのか】

瞬示が興奮した信号を真美に送る。瞬示と真美の関節という関節が淡い緑の時間島の中で鮮やかなピンク色に輝く。

濃淡のない緑一色の世界で、目を開けているのか閉じているのかわからないような、そしてどちらが上か下かもわからない。イリはすべての感覚を失う。眠りそうになる意識を必死でつなぎ止めるようにノロの名前を何度も何度も呼び続けるが、自分の声すら聞こえない。

【イリは大丈夫だろうか】

【時間島の中にいる限りは大丈夫だわ】

【でも時間島の中と外の区別がはっきりしないなあ】

少しのんびりとした信号を送る瞬示に、真美が強い信号を発する。

【瞬ちゃん！】

ふたりの目の前に三次元的な感覚で見えるものが初めて現れる。碁盤の目をした数えきれないほどのグリッドが立方体に昇華されて激しくお互いにすり抜けながら膨張したり縮小したりして様々な正方体にめまぐるしく変形しながらあらゆる方向に移動する。やがて黄色に輝く形のないものが数多く現れて、点滅しているのか移動しているのかわからない動きを示す。

その後、真っ赤に輝いてはいるが、形が定まらないものが多数現れて同じような動きの中で黄色い輝きと重なったり離れたりする。腹に響く重低音が瞬示と真美そしてイリの身体を激しくバイブレートする。先ほどの変形を繰り返す正方体からの強烈な光線が次々と緑の時間島を突きぬける。衝撃は消えるがその光線が瞬示と真美のすべての関節を強く刺激する。

【気が変になる】

時間島が一瞬、緑色を放棄して真っ赤に染まったかと思うと、沸きだつような泡に満たされる。真美の身体の全関節がピンクに染まり、一カ所に集まって大きな塊(かたまり)を形成すると、一気にまわりに向かってピンクの激しい輝きを発散する。時間島はすぐに元の色を取りもどすと一部がぼやーとした黄色に変色する。

【合体するわ】

確信に満ちた真美の信号が瞬示のあらゆる関節に突きささる。瞬示のすべての関節もピンクに変色して一カ所に集合する。

【マミ！】

瞬示が強力な信号を真美に送ると観念的に真美を抱きしめて合体する。もはや人間の身体ではなく、大きさも形もわからないエネルギーだけのような存在にふたりは変態する。そして、ひとつの身体の中でふたつの意志が共同作業を開始する。

【時間島をコントロールして！】

真美の悲痛な信号に瞬示が津波のような怒濤（どとう）の信号を送り返す。
【ノロだ！ノロだ！ノロがいる】
【ノロだわ！】
ふたりの意志だけがノロの存在を確認し、引きよせ、イリの横に移動させる。ノロとイリの距離が近くなると音もなく虹色の光が現れてすぐに破裂して消える。
【散らばらないうちにブラックシャークに！】
【時間島をコントロールできないわ】
瞬示と真美はひとつの身体の中で意志もひとつになる。完全に六次元の生命体に復帰したのだ。そして合体した意志が一人称となる。
【別の意志が感じられる。最長か】
再び虹色の光が現れてまわりに広がる。
【最長じゃない。ノロとイリ？】
虹色の輝きが急に集結しはじめる。
【ノロもイリもひとつの意志に収束したのか】
色が消えてまぶしい白い点が残る。
【今だ！ブラックシャークに戻ろう】
【だめだ。次元調整がうまくいかない】

【分離する】

ここで意志が分離する。まず、真美の意志が信号を発する。

【どうすることもできないわ】

そして瞬示の意志も信号を発する。

【ブラックシャークもろとも次元移動するしかない！】

第七十三章　交錯

第七十章から前章（第七十二章）までのあらすじ

地球では最長の説法でアンドロイドが神という概念と子供を造ることに関心を持つ。ノロはそれが最長の誘惑であることに気付くこともなく六次元の生命体が三次元の世界に踏みこんできたと確信する。ノロの惑星に戻ってノロの家の地下室に降りると瞬示と真美がいた。そこで古本屋の店主からもらった本のことについて話しあう。

アンドロイドが子供を造った場合のノロの説明にＭＹ２８とＭＡ６０が悲嘆にくれたとき最長が現れる。対談が始まるとノロの想像力が最長を圧倒する。最長は六次元の世界が巨大土偶に征服されつつあることを告白してノロを六次元の世界に招待する。イリが招待を阻止しようとするがノロは六次元の世界に旅立つ。瞬示と真美は自分たちの正体を知って気落ちする。

地球ではアンドロイドに生殖機能をと願う人間やアンドロイドと、それに反対する人間やアンドロイドとの間に戦いが始まるが、ブラックシャークはノロ救出のため未知の六次元の世界へ次元移動する。そして瞬示と真美はイリとともに緑の時間島でノロの救出に成功する。

【時】永久２３００年

【空】ノロの惑星

【人】ノロ　イリ　瞬示　真美　広大　最長

＊＊＊

ブラックシャークが緑の時間島に包まれたまま光速で太陽に突っこんでいく。

【ぶつかる！】

ピンクの球体の姿をした一心同体の瞬示と真美が急速に分割を開始する。

【もっと急がないと】

すごいスピードでピンクの球体が何度も何度も分割を重ねて真半分に分離すると、それまで以上のスピードで分割を進める。やがて見る見るうちにふたつの人間らしきものに近づく。

【瞬ちゃんの想いがどんどん離れてゆくわ】

【マミの気持ちが見えなくなってしまう】

そして完全にふたつの人間の体型ができあがるとその裸身が紺色に変色する。紺色のジーンズがふたりの身体に張りつくと瞬示と真美はだるそうにノビをする。ふたりはセックスの経験がないのに至福の喜びを共有したあとのなんとも言えない脱力感にひたる。

目を開いたふたりの視野に赤い太陽が迫ってくる。瞬示と真美はあわてて共同作業を開始する。緑の時間島は太陽にのみこまれる直前に空間移動して難を逃れる。

＊＊＊

イリはノロを抱いたままブラックシャークの医務室の前で倒れている。気絶していたのではなく、ただ目を閉じていただけだったかのように目が開く。ノロを抱きしめているのを確認すると、当然のように抱きあげて医務室のドアの前に立つ。

イリは自分の身体がふわふわと浮いているようなふしぎな感覚に陥る。誰かの身体を借りているような、それでいて誰かに自分の身体が支配されているような奇妙な感覚を抱く。突然、ドアが音もなくスライドするとノロを抱えたまま医務室に一歩踏みこむ。自ら歩いているといった感覚はなく奥へ奥へと進む。誰もいない。まわりを見ながら天井に向かって叫ぶ。

「フォルダー、生命永遠保持手術のスタッフはどこにいるの？」

返事はない。イリがまわりを見渡してからもう一度声を出そうとしたとき、乾いた声が聞こえてくる。

「誰？」

「やっぱり、イリだ」

「チューちゃん？チューちゃんなの！」

イリは手術台のクモの巣に気付く。そのとき、瞬示と真美が医務室に瞬間移動してくるが、動揺するイリは気が付かない。

「すぐノロに生命永遠保持手術を！」

「ブラックシャークには誰もいません」

「えっ！フォルダーは？」
「死にました」
ぼう然としてイリが天井のクリスタル・スピーカーを見つめる。瞬示も真美も無言でクリスタルスピーカーとイリを交互に見つめる。
「フォルダーは？」
イリが震えるような声で天井に向かって同じことをたずねる。
「ブラックシャークには誰もいません」
「とにかく手術をするわ。環境を整えて。お願い！チューちゃん」
イリはクモの巣を払いのけるとハアハアと肩で息をしながら手術台にノロを載せようとする。そのとき、初めて近くにいる瞬示と真美に気が付く。
「今のチューちゃんの言葉、聞いた？」
ふたりは声を出さずに悲しそうにうなずくと手術台にノロを載せるのを手伝う。イリが何かを必死でこらえながらノロを裸にする。
「電源供給開始。生命永遠保持手術の準備にかかります。」
イリが黄ばんだ白衣を羽織るとやはり黄ばんだマスクをする。鏡に映った自分の姿を見てうろたえる。白衣は自動的に身体にフィットすることなく、だらっとしたままであちらこちらに茶色い小さな穴が開いている。

「消毒スプレーを噴射」
「噴射できません」
中央コンピュータが必死にイリの指示を実行しようとするが。生命永遠保持手術装置は順調に作動しない。
「手動に切りかえて！」
悲痛な声が医務室にこだまする。イリは泣きくずれて床に倒れこむ。
「何が起こった！」
瞬示が天井に向かって大声をあげる。
「なぜ、もっと早く戻ってこなかったのですか」
イリは顔をあげると一見した限り以前と変わらない医務室をふしぎそうに見渡す。
「あれから、二千年もの年月がたっています」
「二千年！」
三人が同時に叫ぶ。しかし、イリだけが驚きから抜けだす。
「ノロに生命永遠保持手術をする方法を考えて！」
「ワタシが手術をします」
「チューちゃんが？」
イリの目がすわる。

「わかったわ。お願いします。私は助手に徹します」
しばらくすると手術室のドアが横にスライドする。廊下の方が明るいのか、逆光になってその姿はよく見えないはずなのに、瞬示と真美はもちろんのこと、イリにもはっきりと見える。
「ノロじゃないか」
三人が手術台のノロとドアにいるチューちゃんを交互に見つめる。
「ノロのアンドロイド？」
瞬示と真美が驚きながらたずねる。
「いいえ。ここにいるチューちゃんは中央コンピュータの自走式の端末装置のようなものなの」
イリは動揺することなくノロが寝ている手術台の横に高さ二〇センチほどの台を置く。ノロの姿をした中央コンピュータの端末装置、イリが改めてチューちゃんと呼ぶ端末装置が手術をしやすくするためだ。
「ワタシを見て驚かないのですか」
チューちゃんがイリを見つめる。
「うすうすチューちゃんのこと、わかっていたの」
「そうでしたか」
チューちゃんがニーッと口を横に大きく開く。

「薬品や道具のなかには酸化して使いものにならない物があります。周到な準備が必要です。細かなところではワタシが助手に回ります。やはりイリの腕が必要です」

＊＊＊

瞬示と真美がブラックシャークの船外に出る。緑色に輝きながら付近を注意深く観察する。ふたりの強力な視力がはるか彼方に赤茶けた惑星をとらえる。真美が腕を少し伸ばす。その手首にあるはずの腕時計がない。

【腕時計がないわ。どこかで落としたのかしら】

ふたりはお互いの姿を見つめてからポケットを探る。

【小銭入れがない】

【ハンカチもないわ】

途方にくれてしばらく「なぜ」という表情を続ける。瞬示が思い出したように赤茶けた惑星に視線を移す。

【あの惑星に行ってみよう】

緑色に輝く糸のような航跡を残して赤茶けた惑星にたどり着く。

【大気がないわ】

ふたりは着地したまわりを分担して観察する。先に瞬示が何かを見つける。

【あそこに何かある。行ってみよう】

緑色に輝く身体がエアカー程度の速度で移動する。

【あれは！】

船底を上にした白と茶色のまだら模様の宇宙戦艦が見える。

【ホワイトシャーク！】

まるで巨大な白い鮫が陸に打ち上げられて腐ったように見える。口を大きく開いてその中に鋭い歯のようなものが見えるが迫力はない。

【ここにホワイトシャークがいるということは！】

ホワイトシャークのことを気にしながら、ふたりはそこから確かな場所に移動する。瞬示は造船所の赤茶けた残骸と今いる位置を再確認する。

【ここはノロの家があったところだ】

瞬示がピンクの光線を地面に当てる。砂が舞いあがって重そうな扉が現れる。

【地下室への扉だ！】

瞬示が扉の錆びついた丸い取っ手を引っ張る。

【待って！】

瞬示は扉から離れた丸い取っ手を持ったまま尻もちを着く。扉の取っ手の表面から赤い粉が分離して空中を漂う。

【よかった】

真美が目を閉じて小さく首を前後に振る。
【中へ瞬間移動すればいいんだ】
瞬示が納得の信号を送ると真美が再び瞬示を制止する。
【待って！瞬ちゃん】
再び真美の制止を無視して瞬示が地下室に移動する。すぐ真美が瞬示にぶつかるように移動してくる。
【真っ暗で何も見えない】
ふたりの強力な視力を持ってしても何も見えない。
【誰か、ここにいるのよ！】
暗闇の中で瞬示が身構える。
【私の姿を見たいか】
ふたり以外の信号が地下室にこだまする。まるで玉がはじけるように光も色もない刺激がふたりのまわりでパチパチと音をたてて広がる。
【その声は最長！】
同調したふたりの信号を無視して、最長が膨大な量の信号をふたりの全身に点在するすべての脳に送り続ける。最長の信号を必死で受け止めるが、ふたりは疲れ果てて床に倒れこむ。
何も見えないはずなのに鮮やかな青いものがふたりを誘うように舞いながら落ちてくる。青

いしおりだ。ふたりはまるで夢から覚めたように腕を伸ばす。

【店を閉める】

冷たい声が上から聞こえる。同時にカンカンカンという音が聞こえてくる。

「頭が割れそうだ」

瞬示の熱気を帯びた肉声が輪をかけるように真美を襲う。

「全身が割れてしまう。苦しい」

たまりかねたように口を開いた真美の肉声が逆に瞬示を襲う。ふたりはいつの間にか開いている天井の扉に向かって見覚えのあるくたびれたはしごを登ろうとする。

【この裏切り者めが】

誰かがはしごを外そうと激しくゆする。

【最長！】

真美が黄色い信号を発する。「ギギギー」という不気味な音がすると扉が閉まる。瞬示は飛びあがって閉まった扉を右肩で押し上げようとしたままの姿勢で凍りついたように動かなくなる。

【瞬ちゃん！】

真美の強烈な信号に瞬示から反応はない。

【ノロ！助けて！】

真美が初めて瞬示以外の者に助けを求める。そのとき足元のしおりから鮮明な青い光線が真上の扉に向かって伸びる。

＊＊＊

「ノロ！」

イリの透きとおった声にノロが目を開ける。ノロは上半身を起こすとそのまま身を寄せてきたイリを強く抱きしめる。

「イリ、イリ」

ノロはまるで母親の胸で泣きじゃくるようにしがみつく。イリもノロを強く抱きしめる。イリの涙がノロの涙と混じりあってお互いの顔を洪水のように満たす。

「イリ、怖かった」

ノロがポツンと声をあげて泣き続ける。イリは鼻の奥にツーンとした軽い痛みを感じると鼻声で話しかける。

「眠るのよ。安心して眠るのよ。ここはブラックシャークの医務室。安心して……」

イリが繰り返してノロの耳元でささやく。ノロはうなずきながら、子守歌を聞く赤ん坊のようにやがて規則正しい吐息をイリの胸に吹きかける。完全に眠ったのを確認するとノロをベッドに寝かせて手術台のまわりを見る。ノロと瓜二つの姿をした中央コンピュータの端末装置はもういない。

「チューちゃん、ありがとう」
イリは現状を把握するために手術室を出て艦橋に向かう。
「瞬示、真美」
ときおりふたりの名前を呼びながらイリは歩くスピードを速める。
「フォルダーが死んだなんて……」
イリの足取りが少しあやしくなる。やっとの思いで艦橋にたどり着く。艦橋の窓から赤茶けた惑星が見える。
イリは船長席に座ってコントロールパネルのボタンを押すと目の前に現れた透過キーボードをたたく。しばらくすると大きな息を吐いてたまっていた緊張感を解放する。
「ブラックシャークは正常な状態を維持しているわ」
メイン浮遊透過スクリーンが天井に現れると、医務室のベッドで熟睡するノロの姿が映しだされる。その映像をサブ浮遊透過スクリーンに移動させると赤茶けた星がメイン浮遊透過スクリーン全体に広がる。イリは一目でその星がノロの惑星であることを見抜く。赤く染まったイリの顔から放心したような声が広がる。
「ノロの惑星が……」
イリは気を取りなおしてメイン浮遊透過スクリーンを見つめながら、何回かに一回はサブ浮遊透過スクリーン上のノロの様子を確認する。

あの豊かな青い海はなく緑の森もない。あまり好きになれなかった黄色い砂漠もない。イリはふとノロの言葉を思い出す。

「砂漠はとても大事なんだ。砂漠は、虫はもちろんのこと病原菌やウイルスですら住みづらいところだ。そこにオアシスを造れば、人間にとって一番住みやすい場所になる」

急にイリの涙がほほを伝わる。今のイリにはうす茶色の鍵穴星より赤茶けたノロの惑星の方が哀れに見える。

希望につながる光景が期待できないと自覚すると、ふしぎとそれまで繰り返していたノロの確認作業を無意識のうちに怠る。

メイン浮遊透過スクリーンの一画から鮮明な青い輝きが飛びこんでくる。その鮮やかさにイリの視線が固定される。

「イリ！」

イリを呼ぶ強烈な声がする。

「イリはどうするのですか」

中央コンピュータの声だ。

「どうするって？」

イリがサブ浮遊透過スクリーンを確認する。ノロの姿がない。

「ノロ！」

イリは強烈な打撃を受けたあと、どうしようもない脱力感にひたる。

「どこへ行ったの！ノロ！」

＊＊＊

「どこへ行ったの！瞬ちゃん！」

真美は何も見えない狭い空間から瞬示が消えたことに気が付く。瞬示と真美が離ればなれになったことは今まで一度しかなかった。それは真美が自宅前でもうひとりの真美に会ったときだった。自分の意志とは無関係に摩周湖上空の時間島に瞬間移動させられて、瞬示と離ればなれになったことを思い出す。

＊＊＊

イリの身体が意志とは無関係に緑色に輝く。その輝きがすぐに膨張してブラックシャークを包みこむ。イリの緑の時間島にブラックシャークの中央コンピュータが膨大なデータを送りこむ。緑の時間島はその全体がきめ細かく、しかも濃淡をつけながら複雑に輝き、点滅する。そして全体が同時に一瞬強く輝いたあと消える。

＊＊＊

真美は自分自身に出会ったときのことをなぜか強烈に思い出す。あのとき、なぜ自分がはじけ飛ぶようにあの場所から消えなければならなかったのか。もうひとりの自分が消えても、おかしくはなかったのに、なぜ自分の方が消えざるを得なかったのか。興奮した真美の身体がピ

ンク色を通りこして真っ赤に輝く。地下室は熱気に包まれて、すべての本が発火してメラメラと燃えはじめる。真美はその場から姿を消す。

＊＊＊

イリは中央コンピュータに大きな声をあげながら医務室に向かって全速力で走る。

「チューちゃん、本当にノロに生命永遠保持手術をしてくれたの」

すぐに中央コンピュータから明確な返事が戻ってくる。

「イリが見たとおりです」

「私、はっきり覚えてないの。うわの空でチューちゃんの指示に従っていただけなの」

「ワタシもうわの空で手術をしました。なぜなら手術の必要がなかったからです。イリが安心すればいいと思って立ち会いました」

「やっぱり！ノロは、ノロは大丈夫なの？」

「大丈夫です。ついさっき、イリが連れ戻したじゃないですか」

「私が？ノロはブラックシャークに戻ってきたの？ノロは生命永遠保持手術の効果を失っていないの？」

イリが立てつづけに脈絡のない疑問をぶつける。

「そうではありません」

「えっ、どういう意味？」

「六次元の生命体になったのです」
「えー？」
「驚いたあとは説明しろと言うことになるのでしょうが、説明できません」
イリは医務室のドアの前で立ち止まってうつむくと黙ってしまう。
「イリ、見せたいものがあります。そのまま部屋に入ってください」

＊＊＊

瞬示は目の前でメラメラと揺れる炎を見つめる。それは熱を伴わない輝きで、見る者にこれといった感慨（かんがい）を与える要素のないつまらないものだと解釈して特に反応もせずに見つめる。その炎の先端から視線を下にずらす。
「火炎土器……」
奇妙な炎を発していた火炎土器の表面にメッシュのような模様が現れて急速に広がる。まるで火炎土器が膨張して巨大な立体的な座標を形成するようにも見える。瞬示はその中で自分の座標を知ると、火炎土器の口の部分から赤いエネルギーを吸収する。瞬示の身体が太陽のように輝く。
【マミ！】

＊＊＊

「そこに身体を」

イリが中央コンピュータの声に反応してスキャン装置内のベッドを見ると、消えたはずのノロがいびきをかいて眠っている。

「ノロ……」

イリは安堵の息を吐いてノロの横に身体を窮屈そうに横たえる。スキャンが開始されると天井の浮遊透過スクリーンにふたつの透視映像が映しだされる。中央コンピュータからの説明を待つまでもなく、その映像の太い方がノロの身体の内部で、細い方がイリの内部であることに驚く。

――人間の身体じゃないわ

急にサーチやリンメイから聞いた瞬示と真美の身体の話を思い出す。

「この身体の構造は瞬示と真美と同じだわ」

イリの言葉に中央コンピュータが素直に反応する。

「イリもノロも、もう、この世界、三次元の人間ではありません。しかも次元移動に失敗したような結果になっているようです」

＊＊＊

瞬示の目の前で最長が仁王立ちして瞬示をにらむ。そして軽くうなずくと大量の六次元の信号を送るが、瞬示は反応することなくただうんざりしたような表情をする。

「もういい」

「次元が違っても、どの世界も同じことを繰り返しているだけだ。でも何とかしなければならないと思わないか」
「ぼくやマミの使命はもう意味がなくなった。そうだろ？もう、構わないでくれ」
「逃げるのか」
「逃げるとは」
「生命の矛盾から逃げたいのだろう」
「逃げるとは言ってないし、逃げるという意味もわからない。こちらからはたずねることはないし、知りたいこともない」
瞬示は何も持ち合わせていない自分の気持ちを単純に表す。疲れているわけでもない。かといって離れればなれになってしまった真美を捜す気力もない。
最長はそんな瞬示の意識に驚いてかすれた声を出す。
「瞬示の意識が『空』ではなく『無』の世界に移動しようとしている。なんとかしなければ」

＊＊＊

「飲むしかないな」
眠りから覚めたノロはイリの手を握って立ちあがると中央コンピュータ室に向かう。
「チューちゃんと？」
「うん」

「喜んでと言いたいところですが、酒がありません」
ノロがイリと並んで中央コンピュータ室に入る。
「あったとしても、防腐剤が大量に入った酒でしょう。あれから二千年もたっているのです」
「二千年か」
ノロは別に驚くこともなくつぶやく。イリもノロから免疫をもらったのか「二千年」など気にも止めていない。ノロが目の前にいることに満足しきっている。
「やっとチューちゃんとお酒が飲めると思ったのに」
イリが初めて笑顔を見せる。
「まあ、もう食べ物や飲み物を必要としない身体になったから、どうでもいいけれど」
ノロは中央コンピュータ室の隅っこにある机の前の椅子(いす)をイリに勧めるとその横に座る。
「二千年。まるで浦島太郎ね。でも、とても竜宮城と呼べるようなところじゃなかったわ」
「地獄のようなところだったけれど閻魔(えんま)大王はいなかったなあ」
「ふたりともものんきなことを言っている場合じゃないと思いますが」
「二千年先であろうと、二千年前であろうとすぐ移動できるんだから、あせる必要はない」
「ノロ！」
急にイリが叫ぶ。
「フォルダーが死んだのよ！」

「なに！」
ノロは瞬間的に何もかも理解する。
「生命永遠保持手術の効果が消えたんだ」
「どうして？」
「ブラックシャークが六次元の世界に移動したとたん効果が消えた」
イリの首がガクッと落ちる。
「フォルダー……」
ノロもうなだれる。
「フォルダーはあなたが時間島に入ると生命永遠保持手術の効果を失って死ぬかもしれないと心配してあらゆる手を尽くしたわ。そのフォルダーが生命永遠保持手術の効果を失って死ぬなんて……」
「フォルダー……すまなかった。フォルダー……」
ふたりは泣きくずれて抱きあう。悲しみから先に脱出したのはイリで涙をぬぐうとノロに疑問をぶつける。
「ノロ、私たちいったいどうなったの。もう人間の身体じゃないわ。瞬示と真美と同じ身体になっているわ」
イリが胸に手を当てる。

「そのとおり。六次元の生命体になってしまった。正確に言うと六次元的三次元生命体だ」
「なんなの。それ？」
「簡単に言えば三次元の生命体が六次元の生命体の改造手術を受けたということさ。瞬示と真美とは違うが、結果的にはあのふたりと同じような身体になってしまった」
「ということは、二心同体になったってこと？」
「うーん、一心二体でもないし、ちょうどその中間って感じだ」
イリが複雑そうな表情で言葉をつなぐ。
「一・五心、一・五体？」
「すごーい表現だ。イリはスーガクという俺の昔の恋人そのものだ！」
「そんな恋人は変人だわ。私はまともよ。でも、うれしいわ！わかってくれたのね」
はしゃぐように喜んでから、イリは真剣な表情に戻してノロにたずねる。
「一瞬のうちに二千年も時間が流れたのはどういうことなの」
「六次元の世界の時間は三次元の時間とはまったく違う。俺たちの時間は直線的で一方的だが、六次元の世界の時間は前進や後退するだけではなく、上にも下にも左にも右にも進んだり戻ったりすることができるんだ」
「腕時計を六つも腕に巻きつけなければならないの？新しいファッションね」
ノロは小さくうなずくとイリの顔を見つめるだけでため息すらもらさない。

＊＊＊

「誰なの」
真美は自分のごく近いところに気配を感じる。
「瞬ちゃん？」
「わしじゃ」
真美は誰の声か見当もつかず、とまどう。黄色の輝きが現れてトラの縞模様のようになったあと黒い装束に身を包んだ老人が現れる。
「大僧正！」
「このたびは弟、最長が迷惑をかけたようじゃ」
「生きておられたのですか」
真美が畏敬（いけい）の念を抱く。
「死んでおる」
「！」
「驚かせて申し訳ない。死んだのは事実で、今のわしは幽霊だと思ってくだされ。ところで、瞬示の姿が見えぬが」
真美はこれまでの経緯を話そうとするが、すぐに大僧正の声が真美に届く。
「わかった。わしが捜しましょう。それより今回の混乱はかなりひどい。いずれにしても因果

関係抜きの整理整頓が必要じゃ」
　真美は大僧正が目を閉じて黙然(もくねん)するのをじっと見つめる。
「幽霊のわしにできることは六次元の世界を封印することじゃ。しかし、それだけですべてが解決できるわけでもない」
「と言いますと」
「あまりにも、色々なことが絡み合いすぎた。本当はもっと早くほぐすべきだったのだが、その時期に誰も気が付かなかった。ノロと瞬示、真美の出会いが遅すぎたのじゃ」
「遅すぎた？」
「弟の最長は悪者ではない。しかもノロとおまえさんたちをつなごうともした。問題は複数のしかも複雑な時間の次元がうまくかみあわなかったのじゃ」
「大僧正、わたしにはむずかしすぎます。もう少しやさしく教えてください」
「すまなかった。わしとしたことが。最長には観客席から好奇心を持って眺めるのはいいが、グランドに降りてプレーするなと言っておいたのじゃが……」
　大僧正の黒っぽい身体が明るく輝くと、くつろいだ乳白色のミルクのような空間が真美を包みこむ。そして真美はすべてを理解する。
「やっと瞬ちゃんと自分のことが完全に理解できました。でもこれから先、どうなるのですか。わたしはどうすればいいのですか」

まだ大僧正がいると思って真美はしゃべり続ける。

＊＊＊

「三次元の世界では時間軸は直線的でぶれないはずなのにパラレルワールドが存在している」

「永久の世界と西暦の世界のふたつのことを言っているの？」

「そうだ。ところがこれは非常に作為的だった。永久の世界と西暦の世界はまるでＤＮＡ（遺伝子のことで二重螺旋（らせん）構造をもつ）のように絡まっている。このことにもっと早く気が付くべきだった。まあ、手品のようなもので種明かしされればそれまでなんだが、パラレルワールドというものはペアを組むということだ。しかし、初めからそれに気付くのは不可能だった」

イリが首を傾げて理解できないという表情でノロを見つめると、ノロの一部の言葉を盗んで甘える。

「そんなことより、私のことに早く気が付いて欲しかったわ」

「それは、もっと困難なことだった」

ノロは口を広げてニーッと笑うが、そのあとすぐにイリの胸に顔を埋める。

「母さんのニオイがする」

ノロは子犬のようにイリの胸の中で顔を動かす。

「もう、ずいぶんどころか、ずーっと昔のことなのに、今、なぜかこの感触を覚えている。母さんのニオイだ」

ノロが急に涙を流す。

「母さんのニオイ」

イリは胸の中で涙を流すノロをやさしく力をこめずに微妙な肌合いで抱きしめる。

＊＊＊

瞬示も思い出したように真美の気配がまったく感じられないことに当惑する。これまで真美に恋愛的な感情を持ったことはない。今もそうなのだが、六次元の世界で自分たちが合体できることを知った以上、これまでのような関係を保つことができるのか不安に感じる。それは意識することなく呼吸をしていたのに、息をする前に自分が必要とする空気の量を計りながら吸いこむような作業をしなければならないことを意味する。

今、瞬示はなぜ自分がエネルギーを補給することなく、時空間を自由に行き来できるのかも理解している。それどころか六次元の世界と三次元の世界を往来することもできる。ただし六次元への世界へは真美といっしょでなければ移動はできない。

「最長はひとりで六次元の世界に移動している。ぼくらの身体とは構造が違うけれど、ふたつの次元を往来するにはペアが必要なはずだ」

瞬示が自問する。

「大僧正！そうだ。大僧正と最長は双子の兄弟だと言っていた！でも大僧正は死んだはずだ。死んだ？」

瞬示は重大なことに気が付く。
「生きているんだ。大僧正は！」

＊＊＊

「六次元の生命体はなぜ私たちの世界に介入してくるのかしら」
「介入せざるを得なかったのかどうか、今でもよくわからない」
「私たちの方がなんらかの形で六次元の世界に迷惑をかけたんでしょ」
「数々の時空間移動装置の時空間移動の失敗が、彼らの世界に重大な影響を及ぼした」
「その話はあのヤシの木の下でたっぷりと聞いたわ」
「西暦の世界の摩周湖で一度に七基も時空間移動装置が事故を起こしたことが原因だと思う」
「でも、元はといえば、あの埴輪（はにわ）の鳥が製造した緑の時間島という六次元の世界の時空間移動装置が原因なんでしょ」
「埴輪（はにわ）の鳥が製造した緑の時間島か。イリ、うまい表現だ」
ノロがにっこりと笑顔を造って言葉を続ける。
「六次元の世界の因果律は三次元の世界の因果律では理解できない。六次元の世界には三次元の世界と同じ因果律は存在しない」
「原因がなくて、結果だけが存在することもあるの？」
「結果から原因が生まれたりもする」

「たとえ、時計を六つ持っていたとしても、私には理解できないわ」
「答えは簡単さ。こう考えればいいんだ。最長がアル中で酒を飲みながら前後見境もなく物語を書いた。相棒の大僧正の広大はまったくそれに気が付かなかった。あるとき広大が最長の書いた物語を読んで筋書きがあるものの時系列や空間系列が無茶苦茶なことに気付いたんだ」
「最長はアル中の作家だって言うの」
「超特殊な作家だ。六次元の生命体は人間の想像が及ぶ生命体ではなく、まったく想像も予想もできない行動をする。瞬示と真美のように絶えず信頼関係を保ちながらいっしょに行動するのではなく、たもとを分けた双子の兄弟である六次元の生命体が三次元の世界に出現して混乱させた」
　ノロが一呼吸置く。イリはノロが一気にしゃべりだすのを覚悟する。
「たとえば、二次元の世界に三次元の世界の生命体の一部が現れたとする。紙のような平面しか持たない二次元の生命体から見ると、自分たちの因果など通用しない事件が次々と起こる。通常、次元が異なれば相互に干渉のしようがないのに、二次元の世界の科学が発達して紙の平面から飛びだすような事件を起こして三次元の世界に影響を与えてしまったとしたら、三次元の世界の生命体はその飛び出たところから二次元の世界に侵入してその原因を突きとめようとするだろう。しかし、二次元の生命体から見ると、三次元の生命体の動きや目的などわかるはずもなく、まるで三次元の世界は因果律のない世界に見えるはずだ。つまり、なぜ二次元の世

界に現れたのか、知るよしもないということだ」
イリは目を閉じて想像してみる。頭の中で紙の人間を造って紙の上のあちらこちらに貼りつけたり、それをはがしてまったく別のところに貼りつけたりする。イリは突然目を開いて机の上の便せんを一枚はがして丸める。円い筒がイリの手の上にある。
「二次元が三次元の世界になっちゃった。二次元の世界の人間は大混乱ね」
「元へ戻さなければならないということはない」
ノロはイリから巻物のようになった便せんを受けとると、そのままくしゃくしゃにする。
「こうならないように、手立てしなければならない」
「解決策はあるの」
「わからない。でも広大が解決しようと動き回っていたはずだ」
「広大？大僧正の？ノロが考えていることはいつもわからないことだらけだわ。私たち、本当に一・五心……なんだっけ、もうそんなことどうでもいいわ」
じっとノロとイリの会話を聞いていた中央コンピュータが声を出す。
「ワタシには理解できます」
いつの間にか逆にノロの腕の中に顔を埋めていたイリが目を丸くして驚く。
「教えて」
中央コンピュータがイリに説明を始める。

「数学的には六次元の世界はふしぎな世界でもなんでもありません。時間が止まったり、マイナスになったりしても、演算は可能です。三次元の世界と六次元の世界が混在していても数学的にはなんら問題は生じないのです」
「もう、やめて。みんな狂ってるわ。私は『スーガク』というノロの恋人じゃないわ」
イリが天井に向かって叫んだとき、ノロも叫ぶ。
「誰かが来る！」
イリが反射的にノロの腕を取る。
「瞬示か、真美か、それともふたりともなのか」
瞬示と真美が現れる。お互い見つめあって驚きの表情と納得の表情を点滅させる。
「今はここしかないのよね。安心して身を置けるところは」
真美がノロに軽く頭を下げる。ノロがイリの手を取って瞬示と真美に歩み寄る。
「俺たち新入生だ。先輩よろしく」
しかし、笑顔で近づくノロたちとは対照的に瞬示と真美の表情が急にこわばる。
「どうしたの？」
「どうしたんだ」
「ぼくら、一心同体だとわかって、なんというか、今まで意識したこともなかったことが……」

瞬示の浮いた言葉と違って真美が単刀直入に言葉を発する。
「愛なんて考えたこともないのに、通常あり得ない状況でわたしたち、いつもいっしょにいました。もちろん嫌いなわけではありません。ところが六次元の世界に足を踏み入れたとたん、わたしと瞬ちゃんはひとつになりました。それはとても素晴らしいことでした。でも三次元の世界に戻ったら別々なんです。ずーっとそうだったから違和感あるわけがないのに、いったん六次元の世界でひとつになってしまうと、ものすごく違和感を感じるの」
真美に瞬示が大きな相づちを打つ。
「そう深刻に考えるな。俺もイリといっしょに六次元の生命体になってしまった」
瞬示と真美が驚くこともなく静かにうなずく。
「広大と最長がここに来てくれたら、これから何をすべきかがはっきりするんだが」
ノロが身体を緑色に輝かせる。
「おもしろいものを見せよう」
緑色に染まった身体が変形して鳥のような形になる。瞬示と真美が声をそろえる。
「埴輪（はにわ）の鳥だ！」
「三次元の世界では、緑の時間島、つまり六次元の緑の時空間移動装置、いや次元移動装置が埴輪（はにわ）の鳥に見えるんだ。どうも六次元の次元移動装置は二種類あるようだ。ひとつは緑の埴輪（はにわ）が造る次元移動装置。この移動装置は使い勝手が非常にいい。次元移動の自由度は高いようだ。

俺たちのちゃちな時空間移動装置にたとえるとわかりやすい。チーチー」

ノロが埴輪（はにわ）の鳥の鳴き声を真似する。

「ノロ、元の姿に戻って」

イリが不安そうにノロに注文する。ノロが元の姿に戻るとイリが急に笑いだす。

「元に戻っていないわ。今度は遮光器土偶に変身したの？」

ノロもイリ以上に大きな声で笑う。

「もうひとつの次元移動装置は？ひょっとして……」

瞬示がノロの答えを引きだそうと割りこむ。

「そう、もうひとつは黄色の時間島。これは俺たちの時空間移動船のようなもの。自由度は低いが、なんでもかんでも大量に次元移動させることができる。もちろん、使いこなせば緑の時間島だってかなり大きなものを移動させることができる。緑の時間島と黄色の時間島の最大の違いは因果の清算ができるのかどうかだ。さっきも言ったように黄色の時間島は自由度は低いが単純に使いこなせる。でも黄色の時間島に入るとその都度、因果が清算されてしまう。だから、黄色の時間島から出るとまったく違った世界に放りこまれたような感覚になるはずだ」

それまでの経験を思い出してそれこそすべてを清算したように瞬示と真美はノロを見つめながら感激する。そのとき艦橋が少し黄色っぽく染まってぼんやりした人影が現れる。やがてはっきりとした姿が浮かびあがる。

「最長！」
「さすが、ノロだな」
瞬示、真美、イリが驚くが、ノロは動ずることなく、すぐに詰問する。
「これまでのことを説明しろ！」
「いつもながら性急だな」
最長が不愉快そうにノロを見つめる。
「俺たち、仲間になったのに、なんの連絡もせずに急に現れたんだから、最長には答える義務があるんじゃないかなあ」
最長が仕方がないというような表情をしてから口を開く。
「最初から目的があったわけではない。巨大土偶が地球に大量に次元移動してブラックシャークの多次元エコーの攻撃を受けたとき、ノロに強い関心を寄せたのは事実だ。多次元エコーを使えばかなりの間、巨大土偶の動きを封じこめることができる。これにはひっくり返るぐらい驚いた」
「そして巨大土偶の人口を減らす方法を手に入れようと最終的には俺を誘拐することにした」
「そうだ」
「いずれにしても六次元の世界の生命体や巨大土偶が三次元の世界にやってきたのは、時空間移動装置の時空間移動の失敗の事故が引き起こした単なる偶然なのか？」

「前にも言ったが、偶然でも必然でもない。ただ事故を起こした時空間移動装置が六次元の生命体にすべりやすい環境を提供したのは否定できないが」
「それはこの三次元の世界にいる六次元の生命体の感覚で、本当はそうではないだろう」
ノロが言い切る。
「確かに。違った次元が交流を持てば、相互に干渉が行われて次元の高い方が低い方に融和されるが、両次元とも混乱が生じる。うまく表現できない」
ノロは最長の言葉にうなずくと再び疑問をぶつける。
「そのことをなんとか表現しようとして、あんな本を書いたのか？」
「それは違う。私が手渡した本の著者は瞬示と真美だ。私ではない。あれはふたりが我々六次元の生命体のある組織、つまり『三次元探索本部』への報告書だ。ふたりは本来の任務を忘れてしまったが、無意識のうちに命令に従ってなんとか三次元の世界での出来事の報告書を作成したのだ。それがあの本の正体だ」
ノロのカンが大きく外れた。ノロはうなずくとまじまじと瞬示と真美を見つめながら大きく首をたてに振る。
「言葉、あるいは文字というものには次元が存在しない。存在するのは言葉という通信手段を持つ生命体の意思だけで、次元は関係ない」
最長の言葉にノロは少し間を置いてから、瞬示と真美から最長に向かってより強くうなずく。

「文字というものは平面に書きこまれたものだから単純に二次元の世界のものだと思いこんでいたが、そうではなく文字は思考が結晶したもの、つまり言語処理システムというものは次元を超える存在だということが今の最長の言葉でよくわかった」

ノロは活字が現れたり、消えたりするふしぎな本の本質を今、完璧に理解する。

「一太郎と花子の無言通信システムは次元を超えた普及の大発明なんだ。しかし……」

ノロが最長の言葉に強く反応しながら、ぶかぶかの服のポケットから手品師のような手つきをして例の本を取りだすと最長が言葉を止める。

「薄くなっている。今まで分厚くなることはあっても薄くなることはなかったのに」

ノロがページをめくる。最長が薄くなった本を見つめると残念そうな表情をする。

「ほとんど文字が消えているはずだ」

「いろんなことを知ることができたけれど、かえってわからないことがそれ以上に増えた」

「意識とはそんなものだ。それは言葉に限界があるからだ。だから最後には理由など存在しないことに気が付くだけだ」

「因果は元々存在しないのか……」

ノロが本を床に落とす。

「過去や未来や、他の時空間に見境もなく移動するから因果が乱れた。いや次元に穴を開けてしまって、そこから因果がもれだして、自分たちの次元から因果を追い出してしまった」

ノロは中央コンピュータを見上げて確認する。
「俺の惑星は二千年の間に軌道が徐々にずれて太陽に接近したのか」
「そうです。その間にすべての生物が絶滅したと思われます」
「因果は存在している」
ノロの言葉をすぐさま最長が否定する。
「因果は存在していない。もうこの世界に高度な生命体、すなわち因果を創造し観念する人類は存在していない」
「まさか。少なくとも俺たちがいる」
「何を言っている！ここにいる者はすべて六次元の生命体だ」
「いや、三次元の生命体の意志を持った六次元の生命体だ！」
ノロが中央コンピュータに怒鳴る。
「今の地球、現実時間（永久二三〇〇年）の地球へ移動しろ！」
最長がノロに立ちはだかるように叫ぶ。
「地球にはもう人間はいない。もちろん地球以外のこの宇宙にも」
「構うな！俺は行く」
最長が忽然（こつぜん）と姿を消す。興奮しているのはノロだけで、瞬示も真美もイリも何がなんだかわからないという当惑の表情でノロを見続ける。

第七十四章　アンドロイドの地球

第七十四章　アンドロイドの地球

【時】永久２３００年
【空】地球
【人】ノロ　イリ　瞬示　真美　Ｒｖ２６

＊＊＊

ブラックシャークが青々とした地球に近づいた後、夜側の上空に移動する。輝きが点在する光景を見つめながら、ノロは口を大きく広げて飛びあがって喜ぶ。
「あれは都市だわ」
イリが強く輝くいくつかの地点を指さす。真美がイリの指さすところを順番に見つめる。
「最長はウソを言ったの？」
先ほどまでの喜びを完全に消去するとノロがイリに首を横に一度振ってから応える。
「あれは確かに都市に違いない」
その言葉に瞬示も真美もうなずくが、イリは首を傾げながらノロを見つめる。
「生体反応を確認しろ」
ノロが大きく開けた口を引きしめると中央コンピュータに命令する。
「現実時間、永久２３００年。地球が太陽を回る軌道は二千年前に比べて、ノロの惑星とは逆

に少し外側に移動したようです。生体反応、確認中」
メイン浮遊透過スクリーンの地球の映像に中央コンピュータの分析結果が重ねて表示される。
「信じられない。全面戦争をしていたのに立派に文明を再構築している」
瞬示の感激に真美が冷ややかに応える。
「でも、あれから二千年後の地球よ。再び平和を取りもどすには十分すぎる時間がたっているわ」
ノロが真美を見つめながら悲しそうにうなずく。
「イリ、生体反応が少しおかしいと思わないか」
「そうね。チューちゃん、もっと詳しく分析して」
イリがメイン浮遊透過スクリーンに表示されたデータを見ながら中央コンピュータに指示する。ノロは直感的に地球の現状を把握すると複雑な表情をしながら瞬示と真美に告げる。
「人間以外の生物はあまり変化していないようだ。その生体反応ははっきりしている。でも、残念ながら人間に近い生体反応はあるが、人間そのものの生体反応ではないようだ」
「じゃあ、あの光の塊（かたまり）は……」
瞬示が途中で言葉を止める。ノロがわずかに首をたてに振る。イリがノロに替わって悲しそうに応える。
「おそらくアンドロイドだわ」

瞬示と真美が同時に身体を緑色に輝かす。
「待て！急いで確認する必要もないだろう」
ふたりの身体から輝きが消えるとノロが中央コンピュータに命令する。
「地球との交信の準備をしろ」
「交信準備完了」
イリの差しだすマイクをノロが握る。
「俺は人間だ。誰か人間を理解できる者はいるか」
中央コンピュータはノロの言葉をあらゆる言語に翻訳すると強力な通信波を地球に向けて発射する。その瞬間地球上を生き物のように光が走り回る。ノロはしばらく反応を待つが、視線をメイン浮遊透過スクリーンからイリに移す。
「混乱している。落ち着くまで寝る暇があるぐらい時間がかかるかもしれないなあ」
ノロはまだメイン浮遊透過スクリーンを眺めるイリに声をかける。
「イリ、船長室に行こう」
振り返るとイリがうれしそうにノロの手を握る。そして仲良く艦橋を出ていく。瞬示は複雑な表情をする真美を同じように複雑な気持ちで見つめる。真美はそんな瞬示にすぐ反応する。
「瞬ちゃん」
瞬示が真美の身体が折れてしまうほど強く抱きしめる。そして少し力を抜いて真美を押し倒

す。ふたりはそのまま地球に瞬間移動したい気持ちにかられる。その気持ちを確かめようとお互いの唇が重なり吸いあう。激しいエネルギーがブラックシャークを振動させる。

＊＊＊

「すいません。皆さんにお伝えしなければならないことがあります」
「なんだ」
「瞬示さんや真美さんにも伝えなければなりません。艦橋でお話しします」
「わかったわ」
船長室で抱きあって眠りにつこうとしていたノロとイリが中央コンピュータの遠慮の塊（かたまり）のような言葉を受けとると艦橋に瞬間移動する。
イリが目の前で抱きあう瞬示と真美の姿を見て悲痛な声をあげる。
「燃え尽きてしまうわ！あのふたり」
イリもすべての力をこめてノロを抱きしめる。
「イリ、苦しい……」
「ゴホン、非常にお取込み中のところ、大変恐縮しますが、地球からの信号が入りました」
ノロはイリからすり抜けると天井のクリスタル・スピーカーを見上げる。瞬示も真美も身体を離す。
「アンドロイドからの通信です」

ノロが大声で中央コンピュータをうながす。
「やっぱり！なんと言っている！」
『人間は亡びたはずで、生き残っているとすればそれはノロに違いない』と言っています。続けて『ノロなら、大歓迎だ』とも」
ノロもイリも、瞬示も真美も絶句する。
「空間座標を送ってきました。どうします？」
「も、もちろん、行く！行くぞー！」

＊＊＊

ブラックシャークは地表近くに空間移動したあとなんらの障害もなく、さわやかな青い照明が点灯された巨大な円形の競技場（コロシウム）の中央に向かって高度を下げてゆっくりと着底する。船底からノロ、イリ、瞬示、真美が降り立つと爆弾が破裂したような拍手で迎えられる。
コロシウムはその大きさにふさわしい大きな歓喜のどよめきに揺れ動いている。通信が開始されてからノロたちがこの大会場に降り立つまでに数時間もたっていない。それなのに数十万人もの人々が集まっていてノロたち四人に割れんばかりの拍手を送る。
「本当にアンドロイドなの」
イリの大声もかき消されるほどの歓声のなか、ノロはイリの耳元で大声をあげる。まるでノロとイリは大声でしゃべるのが仕事のように、お互いの口と耳を交互に交換する。感動のあま

り次元通信が使えることも忘れて大声を張りあげる。一方、瞬示と真美は使いなれた次元通信（これまでふたりは自分たちの信号のやりとりが次元通信だとまったく気が付かないで使っていた）で会話を交わす。

【すごい歓迎じゃないか】

【まるで感動的な曲を歌い続けるミュージシャンか、ホームランを連発する野球選手をはるかに超える歓迎だわ】

瞬示と真美の信号のやりとりを聞いて、ノロもイリも次元通信に切りかえる。

【もし、ここに集まっている者がアンドロイドなら、これほどまでに興奮して歓喜の声をあげるだろうか？】

【……】

イリは混乱しているのか意味不明な信号を送る。

【なんて言った？イリ！】

イリはとまどいながらノロの腕を持ちあげるようにつかむと、今度ははっきりとした信号を送る。

【しっくりこないわ。ここはあれから二千年後の世界なんでしょ】

決してノロは現状に酔いしれているわけではなかったが、素直に信号を送る。

【それほどの時間が経過したあとで俺たちをこのように歓迎するとしたら、ここにいるアンド

ロイドの祖先は俺の惑星にいたアンドロイドの可能性が高い！】

イリがはっとしてノロを見つめると、ＭＡ６０の姿が脳裏を駆けめぐる。

――そうだわ。そうに違いない

確信を大きな声に変換する。

「ＭＡ６０！あなたはここにいるの！」

拍手と歓喜の声が収れんしたわずかな間隙をイリの透きとおった叫び声が意外なほどコロシウムの隅々まで到達する。すぐに新たな大きなうねりが盛りあがって、すぐにそれが大合唱につながっていく。

「ＭＡ６０！ＭＡ６０！」

大合唱が繰り返されて何分か続くと、今度はそのコールが変化して先ほどより大きなうねりとなって四人に向かう。

「ＭＹ２８！、ＭＹ２８！」

やがてコロシウムの一角から鮮やかな青い服を着た十数人の男と女が現れてノロたちに近づく。大きなコールが繰り返されるなか、ノロのそばまで来たひとりの男が腰を折ってノロの耳元に声をかける。

「ようこそ！ノロ様！」

その男がノロに握手を求める。ノロが手を差しだすと温かい手がノロの手を握る。二千年前

のアンドロイドとはまったく違って人間そのものの感触がノロに伝わる。
「アンドロイド？」
「大昔は、そう呼ばれていました」
ノロは目の前の現実を正確に分析しながら瞬間的に言葉を探す。
「大昔はさておき、聞きたいことが山ほどあるんだ」
「すでに歓迎式典の準備が整っています。どうぞ、こちらへ」
アンドロイドに囲まれて、ノロ、イリ、瞬示、真美が歩きだす。女性のアンドロイドがイリに声をかける。
「歴史学でブラックシャークは真っ黒な宇宙戦艦だと聞いていましたが、本当は深い緑色なんですね」
イリが振り返るとすぐさまノロの肩をたたく。ブラックシャークが深緑色に輝いている。
「まさか、ブラックシャークが次元移動船になったんじゃ！」
ノロは立ち止まってなんとも言えない深緑色のブラックシャークを見つめる。そのとき大コールが突然変わる。
「ノロ！ノロ！ノロ！ノロ！」
ノロは立ち止まって広いコロシウムを見渡す。ノロの頭がまったくの白紙に還元される。そしてアンドロイドにうながされるまで我を忘れてぼう然と立ちつくす。

「ノロ様」

再びノロはアンドロイドに案内されるまま歩きだす。

コロシウムの一角で大きな扉が左右に開く。その扉の奥の広い通路の両側には完璧に正装した男と女の人間だと言われれば、人間に見える百人以上のアンドロイドがノロたちを出迎えるために交互に整然と並んで立っている。まぶしいほど明るい青い通路を歩きはじめると瞬示と真美が同時に大きな声をあげる。

「Ｒｖ２６！」

瞬示と真美が見つめる先には両側に整列する人間、いやアンドロイドよりもひときわ背の高い大きなアンドロイドが立っている。茶色の作業服ではなく、お揃いの澄みきった空のような青いタキシードを着ている。

「Ｒｖ２６に間違いないわ」

真美がそのアンドロイドに近づく。

「久しぶりですね」

Ｒｖ２６が一歩前に出るとそのまま瞬示と真美に近づいて頭を下げる。

「二千年間もよく生きていたな」

ノロも驚いてＲｖ２６に近づく。

「あの事件のあと、ＭＡ６０に大改造していただきました」

「ＭＹ２８とＭＡ６０は？」
「たくさんの子供に恵まれて、今から千九百年前ころに老衰でなくなりました」
「子供を！老衰！」
イリ、瞬示、真美、なかでもノロが一番強く驚く。

＊＊＊

広くて豪華な部屋に通された四人が透きとおった深みのある青い大きなテーブルに着くと、Ｒｖ２６が正面に座る。
「なんなりとお聞きください」
「ホーリー……」
ノロが言葉をいったん止める。そして大きく息をしてから言い直す。
「ホーリーや住職……いや、人間はどうなったんだ？」
ノロの言葉にイリも瞬示も真美も緊張してＲｖ２６を見つめる。
「壮烈な戦いでした」
急にＲｖ２６の目に涙があふれる。それを見たノロ、イリ、瞬示、真美の四人はＲｖ２６の話の続きを聞くことを躊躇（ちゅうちょ）する。すぐさま真美が瞬示に信号を送る。
【逃げ出せるものなら、ここから逃げたいわ】
瞬示は信号を送り返すことなく、身体を緑色に輝かすが自重する。その輝きに驚いたイリが

ノロに信号を送る。

【ノロ、どうする？私、なんだか耐えられないわ】

ノロもイリに信号を返すことなく固く目を閉じてうなだれる。

「あれから……」

青い涙を流すＲｖ２６をノロが制止する。

「待ってくれ、Ｒｖ２６！こんなこと、生まれて初めてだ。俺はなんでも見てやろうとこれまで生きてきた。それなのに……それなのに、今はそれができない」

ノロは目を閉じたままテーブルに手をついて立ちあがるとそのまま黙る。その固く閉じられた目から滅多に流すことがない涙を落とす。

「俺が予想していた世界が……まさか、それを今、目の当たりにするとは……」

イリも涙をぬぐって席を立つとノロを見つめる。Ｒｖ２６も引きずられるように立ちあがると同じくノロを見つめる。

「時の流れが大きく変わったんだろう。本来持ち合わせているはずの安全装置が働くことなく人類は破綻してしまった」

ノロはそう言ってから視線をイリに向ける。

「イリ、ブラックシャークに戻ろう」

イリは涙を拭いた白いハンカチが透きとおったブルーに変色しているのに驚きながら、かろ

うじて声を出す。
「でも……でも戻ってどうするの」
メガネを外して手の甲でノロは涙をぬぐってから、イリの現実的な疑問になんとか大きな口を開けてぎこちなくニヤッと笑う。
「今度こそ、平和主義者の人間を誕生させるんだ！」
「ノロ！」
イリも何とか笑顔で応えるとノロはメガネを掛けなおす。
「Ｒｖ２６、地球には超巨大時空間移動船はあるのか」
「あります」
「今すぐとは言わない。百隻、いや千隻ではとても足りない。一万隻はいるかもしれない」
Ｒｖ２６はノロの急変した態度にとまどう。
「何に使うんですか」
ノロが涙で曇ったメガネをずらす。
「ノロの方舟だ。俺のメガネにかなう星を発見したら、地球上のすべての生物を一組ずつ第二のノロの惑星に超巨大時空間移動船で運ぶんだ」
すかさず、イリがにこやかにノロを見つめる。
「今度はパンダとラッコそれにコアラの担当に任命してね」

瞬示と真美はあきれて何も言葉にできない。イリが見事なまでの笑顔をノロに向ける。
「わかった。ブラックシャークに戻るぞ」
ノロの身体がいつもなら緑色に輝くはずなのに青く輝きだす。イリの身体も同じように青く輝きだす。瞬示も真美も伝染病のように身体を青く輝かせる。ノロは何か忘れ物をしたようにあわてて輝きの勢いを落としてＲｖ２６に質問する。
「子供を造るにはＰＣ９８２１のチップセットが必要だ。おそらく誰かがＭＹ２８とＭＡ６０に埋めこんだはずだ。誰が指示したんだ？」
Ｒｖ２６が表情豊かに驚く。
「それは存じません。しかし、ワタシにそのチップセットが埋めこまれましたが……」
「誰に埋めこんでもらったんだ？」
ノロはＲｖ２６を追求すると言うよりは、確認するようにたずねる。
「ＭＡ６０です。ワタシの大修繕のときに埋めこまれました」
「そうか」
しかし、ノロはまだ納得しない。そのときイリがノロの手を取る。
「フォルダーがＭＡ６０に命令したの。フォルダーはチップセットのことは何もＭＡ６０には伝えなかったけれど、そのときＭＡ６０はＰＣ９８２１のチップセットの中身を盗み見したのかもしれないわ。そして自分たちの身体にもＰＣ９８２１のチップセットを埋めこんだのかも

……」

「フォルダーか……」

ノロがやっと納得する。

「ＰＣ９８２１のチップセットを造ったのはノロですね」

「そうだ。ＰＣ９８２１、開発コードネーム、『ブルーチップ』」

「ブルーチップ？」

ノロはＲｖ２６の質問に答えずにじっと見つめる。同じようにノロをじっと見つめていたイリが静かに言葉をはき始める。

「アンドロイドに『情』を注入するために開発された究極のチップセット。心に初々しい青い意思をはぐくむために製造されました。その中枢には一太郎と花子が開発したソフトが組み込まれています」

会場にいる誰もがイリの言葉を静粛に受け止める。沈黙がしばらく続いた後、ノロが大きな声を出して笑う。

「盗作してしまった。一太郎、花子、許してくれ」

Ｒｖ２６がにこやかにノロの手を握る。

「すごいチップなのがよくわかりましたが、ワタシの場合は土台が超旧式なのでＰＣ９８２１、ブルーチップの性能を百％引きだすことができないので、いまだ独身です。でもＭＹ２８やＭ

Ａ６０なら、ブルーチップを埋めこむことで子供を造れるようになったのでしょう。長年の疑問がやっと解消されました」

Ｒｖ２６が感激しながらノロに近づくが、ノロはＲｖ２６の全身を舐めるように見つめると感慨深げにつぶやく。

「よくも二千年も生きながらえたな」

Ｒｖ２６はごく自然にノロにほほえみかけるとノロの疑問に答える。

「さっきも言いましたようにワタシの土台は超旧式なので、酸素に免疫があって錆びにくいのです」

「免疫！」

ノロが笑いながらＲｖ２６を見つめる。

「それにこの軟膏、確かに水虫には効きませんが、ワタシの身体によく合うようで、サビから守ってくれました」

Ｒｖ２６はポケットからペチャンコになってラベルも何もない無愛想な軟膏のチューブを取りだす。

「ワタシのお守りです」

「それは……確か俺が……」

ノロはそう言い残すとさわやかなブルーの輝きを残してＲｖ２６の前から消える。続いてイ

リも瞬示も真美も同じようにＲｖ２６の前から消える。そして深緑からさわやかな青い色に変色したブラックシャークがコロシウムから空高く舞いあがる。そして空の色に同化して姿を消す。

ノロが船長席に座ると中央コンピュータに命令する。

「第二のノロの惑星を見つける旅に出るぞ！ブラックシャーク、いや、ブルーシャーク、次元移動！」

「了解！」